

あとがき

現在、神戸に滞在している。今年は小出楯重没後八〇年ということで芦屋市立美術博物館において「小出楯重を歩く」という企画展がおこなわれている。二月一二日には楯重のお孫さんである小出龍太郎さんが講演するということで、友人に誘われて講演を聴きながら展示を見にいった。龍太郎さんとは旧知で、久しぶりにお会いしたが、講演後の南京町での食事は大いに盛りあがって実に愉しい一夜であった。

今回の展示で衝撃を受けるほど驚かされたのは、大正一四年に描かれた同館所蔵の「雪の市街風景」と、まったく同じ場所で同じ方向の風景を描いた楯重以外のふたりの画家の絵が同時に展示されていたことだった。ひとつは信濃橋洋画研究所で楯重と一緒に講師をつとめた国枝金三の「都会風景」で、もうひとつは楯重の弟子である松井正の「都市風景」である。ともに楯重より一年前の大正一三年に描かれたもの。この三枚の絵はいずれも信濃橋洋画研究所から東南東の相愛女学校と北出時計店の時計塔を望む風景を描き、正面に東西をはしる本町通、交差点の左右に四ツ橋筋を描く構図になっている。

三枚の絵は同じ大阪の市街風景を描いたものだが、それぞれまったく別物である。当たり前といえば実にそのとおりなのだが、同じ風景を描きながら三者が三様の違った世界を現出させている。国枝と松井のはそれぞれ写実的で当時の実際の大阪の町を髣髴させるものだが、面白味に欠けるのに対して、よほどデフォルメされ、荒々しいタッチであるものの、画面からほとばしる力と内部にみなぎるエネルギーを感じさせる楯重の絵は異様な迫力をもって見るものを圧倒する。一目見ただけで画家としての力量の差が歴然としているのだ。芸術とは本当に残酷で、おそろしいものだ。

文学研究といえども、同じだろう。同一作家の同一の作品を論じたとしても、論者が変われば、論ずるものの数ほどの作品をめぐる論文が作製される。時代を超えて長く読みつづけられる論もあれば、書かれると同時に埋もれてしまうよう

な論もある。実にこの現実は無情である。が、生きてゆくということは私たちの才能も含めて、自己のすべてをさらけ出すことにほかならない。少しでもすぐれた論を書くことができるようになりたいという思いに、私たちは逆に生かされているのかもしれない。すぐれた芸術作品からは必ず何かしらパワーを感じさせられるが、すぐれた論文もまた内側からにじみでるような力を感じさせる。互いに切磋琢磨して、そんな論文を書くことができるように精進してゆきたいものである。

(千葉 俊二)